

ソングはシンガしない

sindow-romance

傘は大きいのが好き。

あたしをすっぽり覆い尽くしてしまうくらい大きい傘がいい。透明のビニール傘だったら、もっといい。視界に映る、白いビニール越しの薄白い世界は結構チャーミングだと思うし、傘に雨が落ちて垂れてゆく様を裏側から見るのは超ファニーだし。

そのことにあたしは齡二十にしてようやく気づく。今日のこの日に初めて。どさくさに紛れて勝手に持ってきた男の傘のおかげで、イギリス紳士みたいな真っ黒い渋い傘が大好きだったあたしは軽やかに宗旨替えをする。

傘の骨を通じて手のひらに伝わる雨の感触がビニールに落ちる雨と同期して、そのリズムが震えているあたしの身体に染み込んでくる。それに急かされるように、あたしは歩いている。アスファルトに溜まった雨水が音を立てて、脇を通る自動車のライトがビニール越しにあたしの目を刺して。コートポケットに入れといた携帯電話が震えているのだと思うけど、それは今は知らない。

必要ない。

おれ自殺するから、と電話口で男は言った。その時自室で寝転がっていたあたしは何も言わずに電話を切って、持ち上げたペットボトルを傾けた。ぬるくなったコーラがべとりと舌を濡らして喉に落ちた。

友達だった。二回だけ寝た。寝ぼけた老犬のような顔をした男で、噛み尽くしたガムをもたもたと吐き出す仕草がチャーミングだった。その時電話口で何も言わなかったのは、それがタチの悪い冗談だと思ったからだった。男は時折このような詰まらない冗談を言った。さも、それが面白い冗談であるような顔をして。あたしは男のそういうところが嫌いだった。

二日後、学校で男のことが話題になった。

そういえばあいつ最近見ないよな。おれ、全然連絡が取れないんだよ。メールも二週間返ってこないし。今日もあいつ試験なのに休んでるよな。ちょっとなんか、なんかじゃねえ？見てきたほうがよくない？倒れてたりして、な。孤独死、とか？うははは。都会っぽい。やべ。やばいね。超ヤバイ。ふひひ。でも、おれあいつの家知らんしなあ。おれも。おれも、知らん。あたしもー。あたしも。おれも。

結局、男の家を誰も知らない。あたしは知っている。そして仲間内で一番最近、男とコンタクトをとったのがあたしだった。でもそのことは誰にも告げずに、その日の夕方、あたしは一人で学校帰りに男の家に向かう。別に心配だったわけではなくわざわざ電話で下らない冗談を言った男に文句を言う為に、と言う建前で。

男の部屋は学校から電車で二十分ほどのところにある。駅からは五分、あたしの家からは四分の、閑散とした街だ。駅の構内を抜けて見上げると、深く沈んだ群青色の雨雲の中で赤い夕陽が懸命に反射している。それは、誰かの薄皮を隔てた内臓のようにも見えるし、今にも泣き喚きそうなティーンエイジャーのようにも見える。空はごうごうと音を立てている。

そしてあたしはほぼ一年ぶりに訪れる、その部屋の前に立った。どこにもいくらでもある、安いアパートの二階にある、奥から二番目の表札がない部屋。

呼び鈴をいくら鳴らしても応答がなく、ドアを叩いてみたところでそれは変わらない。名前を呼ぶのは恥ずかしすぎるので最初からする気もないし、だからあたしは男の携帯電話に電話をかける。着信音は、ドアの向こうから聞こえてくる。男が不気味なまでに気に入っていたひと昔前のアイドルソングが、確かに聞こえる。

ドアノブを掴み、捻る。ノブの冷たさが指先の皮膚を伝う。

あたしはドアを引いた。引けてしまった。

開いたドアの向こうに薄暗い部屋が現れる。足を踏み入れると空気が少し重くなって、雨が降ったときの公園の強い匂いがした。狭苦しい男の部屋は一年前と変わらずに矢張り散らかっており、閉められたカーテンの隙間から差す赤い陽光が溢れかえった本や衣服の上をなぞっている。まだ、男は小説とか書いていたのだろうか。昔はよく読まされたのを思い出す。

アイドルソングはその部屋の中央にある卓袱台の下から聞こえていた。その卓袱台の陰から、こちらに向けてによきりと二本の足が伸びている。男がそこにいた。男は胴体だけを卓袱台の下に潜らせてうつぶせに伏せりながら奇妙に背骨を捻らせている。近づく左手が卓袱台の片端から伸びていて、男の腹部を中心にして板張りの床に赤黒い大きな染みが出来ていた。表情は床板に伏せたまま、見えない。苔の上で欠伸をする亀みたいだ、とあたしは思う。

電話を切ると、ソングは止む。あとにはアパート脇の、道路の音が残る。

「ねえ」と、言う。

声は、存在しなかったみたいに床を覆う本の隙間に落ちてゆく。男は微動だにしない。あたしは、今度はさっきより輪郭をはっきりさせて、ねえ、と言うが、男はさっきと同じ位置から動かない。あたしは、動くわけがないのだ、と思う。あたしは、もう男は死んでしまったのだ、と思う。あたしは、男は腹を搔っ捌いて自殺してしまったのだ、と思う。男の左手のそばには薬のプラスチック瓶が転がっていて、わかりやすくいろんな色の錠剤をぶちまけていた。それが太陽の赤い光に照らされて腐り落ちる寸前の果実のような色を放っている。

あたしは電気を点けてから、乾いた赤黒い染みを隠すように部屋の隅にあった雑誌を数冊敷き、その上に膝を下ろした。男の右手の側。何も伸びてない側のほう。右手はきっと、腹の下にあるのだ。卓袱台の上には紐でくくられた原稿用紙の束があって、表紙には手書きの文字で『自殺しない』と書いてある。

あたしは右手で束をめくる。それが、男の書いた小説であることを理解する。

自殺しない。それがタイトル。

アホか、ってあたしは思う。

アホか、って思いながら、でもそれを読み進めてみる。かさり、かさり、と髪の手を擦れる音が赤黒く広がる男の染みの上に積み重なって、消える。

やがて窓から差す赤い陽が黒くなる頃に、雨が降り出した。アパートの薄い屋根に雨粒が打ち付ける音が響いた。なんとなく、去年ここに来たときもこうだった、と思う。男の書いた小説を読みながら、雨が降って、響いていた。男があたしの肩を覆って、何かを囁きながら腹に手を這わせた。あたしの耳は男の舌で濡れて、あたしはなんとなくそれを許容した。

思い出す。

ほぼ一年ぶりに訪れたこの部屋で。男の愛撫を思い出している。男の指は蛇口に溜まった水滴が落ちるように、あたしの身体を這った。だから、あたしは、男の死んでしまったこの部屋で。水滴が落ちるように、男がしたように、あたしの指を、あたしに、這わそうとする。

這わしている。

自分の体温が、上昇しているのだと思う。暖房もついていない、寒い部屋なのに。皮膚が汗で湿っているのを感じている。耳は濡れずに、指は胸の下着の縁を撫でている。雑誌の上に下ろした足が痛くなる。やはり雑誌は座るものじゃない、と思う。座るのは椅子で、もしくは座布団。だからあたしは足を崩す。太ももを広げ、体育座りをする。

広げた足の指先が、男の赤黒い染みに触れる。それは既に乾いている。でも、何かが指先に粘りつく気がした。その粘り気は足の指先を伝ってあたしのくるぶしを這い上がってくるのだと思った。くるぶしを通して、ふくらはぎを撫でて、それは、水滴が落ちるように。粘り気はそのまま這い上がり、あたしの内腿を撫でながらその奥へと伸びる。穴を通り、あたしの内側に入る。それはまるで、一年前の男みたいに。

あたしはもうスカートを捲り上げて、下着の中に右手を這わしている。手のひらに感じる毛の感触がこしょばくて。入り込んだ男の粘り気は内側で広がって、蜂蜜に群がるありんこのように這い回っている。あたしの内側でありんこがうじゃうじゃ這いまわるのは落ち着かないので、あたしは中指でそれを掻きだす。もしくは押しつぶす。這い回るありんこを押しつぶすと甘い味が広がるのだと思う。

いつの間にかあたしの喉は震えていて、その声は道路の音の上で波打っている。

雨音が踊る、その隙間を縫っている。

あたしの心臓は躍動している。

あたしのハートはビートしている。

あたしは同じことを二回言う。

あたしは昔から同じことを二回言う癖がある。

「それ、さっきも言ったよ。」と、男はよく言った。

その男は、あたしの脇で静かに死んでいる。あたしは自分の指の動きに反応して、四肢をくねらせる。その、くねらせた左足が男の右腕に触れる。ひんやりと冷たいそれは、体温の上昇したあたしの身体には心地がいい。

あたしは指を動かすのをやめて、男の傍らに寝転がった。雑誌と、男の染みの上に。ぱたり、と横になると雑誌の上に積もった埃が立ち上がって、雨が降り始めたときの匂いがする。咳き込みながら、卓袱台の下の男を眺める。顔は床板に突っ伏して見えないが、耳は見える。男の耳の穴は相変わらず汚い。あたしはさっきまで自分に突っ込んでいたほうの手を伸ばし、男の耳をほじる。ねとりと湿ったあたしの指先に男の耳かすがこびり付く。男の耳かすは黄色いような白い色をしている。

雨が降っている。

窓の外の街灯の明かりが窓ガラスに流れる雨粒を透過して、あたしの上にも流れ落ちている。あたしは指を伸ばし、男の白い頬を撫でる。冷たい男の頬の上に、男の耳かすが残る。それはね

とりとした粘液に包まれて、街頭の光を少しだけ反射している。あたしの指先には意外と柔らかい男の頬の感触が残っている。

「ねえ」と、あたしは言うけど、男は何も答えない。

「ねえ」と、あたしはまた言うけど、男は答えない。

そして、あたしは最後にもう一度だけ男に電話をかけた。男の傍らでアイドルソングが流れた。ソングは麗らかな乙女の恋心を歌い上げていた。

違う。

歌い上げているのはアイドルであって、ソングじゃないから。

男はもうあたしの電話には出ないから。

あたしの呼びかけには応えないから。

あたしは立ち上がって洗面所で手を洗い、部屋を出ることにする。卓袱台の上にある紙の束を鞆に突っ込んで。玄関に転がっていたやたら大きいビニール傘を拾い上げて。冷たいドアノブをひっ掴んで。

開けたドアの向こうで降り注ぐ雨は、男の透明の傘を強く、強く打って。